



TITLE:

<大會抄録>皖派について : 世界史  
と個人史より

AUTHOR(S):

木下, 鐵矢

---

CITATION:

木下, 鐵矢. <大會抄録>皖派について : 世界史と個人史より. 東洋史研究  
1985, 44(3): 550-551

ISSUE DATE:

1985-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154119>

RIGHT:

## 『歷年記』に見る清初地方社會の生活

岸 本 美 緒

『歷年記』は、清初上海の人姚廷遴が自らの一生の出來事を記録した、約八萬字の回想記であり、一九八二年に出版された上海人民出版社編『清代日記匯抄』に收録されている。作者姚廷遴（字は純如）は、明末の崇禎元（一六二八）年に生まれ、明清交替期の動亂や清初の江南統治を身を以て體驗し、康熙三十六（一六九七）年頃まで生きた人である。名望家の子弟として教育を受けたものの、科擧の試験とは全く縁がなく、市井の一知識人として、一家の生計をたてるためにあくせくと奔走する生活を送った。本報告では、『歷年記』の中から、姚廷遴の經濟生活に關する記事を拾い出し、紹介してみたい。

姚廷遴は、様々な職業を體驗している。概括するならば、清の上海平定（一六四五年秋）直後、十八歳で商賈に手を染めたのを皮切りに、商業を三年程、農業經營（分種）を九年程、上海縣の胥吏を十年程、以上はいずれも極めて不安定な生計手段であったが、その後「坐守を算計し」、老年に至るまで約三十年間、農業（自耕）と塾の教師とで生計をたてた。『歷年記』の年々の記述から我々は、姚廷遴が、多様な收入機會の中で、その時々状況に應じ、取捨選擇を行なっていく様子、及びその背景にある清初上海地方の社會的經濟的變化を読みとることができる。

（岸本美緒先生の御都合により、大會當日に題目・内容が右

記のものに變更されました。）

## 皖派について

——世界史と個人史とより——

木 下 鐵 矢

皖派の學問を、歷史事象として、二つの方向より述べてみたい。第一に、この學派の學問は、世界史のなかでこそ形成されたのだということである。それは、(1)明代中期以降西洋の學術が流入したことによる、曆算學等に於る學力の向上ということと共に、(2)この學派の業績の基本が、顧炎武由來の古韻學を深化し、本文校訂、小學的研究の全てに、その學的認識を行き互らせんとしたものであることにかかわり、抑々その古韻學という學問そのものが、古代インドの達成した言語學の知見によって出來した『切韻』の體系、等韻學の體系によつてこそ、形成され深化されたものだということである。第二は、この學派の學問の性格が、その中心人物である戴震という男の生い立ちに強く依存しているということである。この人物は、徽商の故郷、安徽省徽州府に育ったのであるが、彼自らの證言によれば、十代も半ばになって始めて經書に出會い、道を聞くに志したものである。文字面すら容易でない經書にどう取り掛かつて行けばよいのかという摸索の中で到ったのが、有名な、文字から文章、文章から告知内容へという方法論であった。同時代の學者達が、大旨は年端もいかぬうちに、四書等を覚え込んでしまつていたというのは、決定的に異なる生い立ちに由來する、彼の學問的

精神のかたちと強烈さが、同時代の人々に強い印象を與え、この時代の學問が形成されるについて大きな力を發揮したのであった。

### ファアティマ朝カリフ・ムイッズ

——イスマール派神政君主の像——

菟原 卓

ファアティマ朝カリフ・ムイッズの言動を記録した、カーディ・アン・ヌウマーン著 *"al-Majlis wa al-Mustafa"* の記述からは、現實のイスマール派イマームの像を再構成することができる。

(一) カリフの個人的能力についていえば、彼は單に秀れているだけではなく、超人間的な資質を有しているかのである。しかし、そのようなカリスマ的資質とされているものの多くは、實は人間的な勉學や修練によつて獲得されている。

(二) カリフの國家内に對する姿勢をみれば、彼はまず教導者である。カリフは自ら信徒の教育指導にあたり、彼らの精神的向上と理論武裝を促す。またカリフは信徒の保護者かつ救済者であり、それは具體的には善政となつて顯われる。そうしたカリフの日常は、禁欲主義に貫かれ、國事に没頭する生活であつた。

(三) 對外的には、カリフはイスマール派によるイスラム共同體の統一をめざしており、イスラム、非イスラムを問わず、他の勢力に對するシハード（聖戰）の決意は固い。宮廷はイスマール派の最

大の據り所であつた。

### ナシヨナリズムとイスラム

——オスマン朝末期トルコの場合——

新井 政美

近代西アジアのイスラム復興運動ないしイスラム改革主義の展開については、これまで、イラン及びアラブ地域を中心に論じられることが多かったように思う。それらの地域では、多くの場合、反帝國主義運動がイスラム復興運動とほとんど同義であつたり、あるいは、民族運動の指導者が同時にウラマーであつたりした。それらに對してトルコの場合、ナシヨナリズムはイスラムの批判を浴びながら成長した。さらに、アタテュルクによる國家建設が、イスラムを徹底的に排除する形で行われたため、近代トルコにおけるイスラムは、せいぜいアブデュルハミト二世の汎イスラム主義がとりあげられる程度で、トルコ人が實際にイスラムの改革に眞剣に取り組んだことや、あるいは、トルコ人ナシヨナリストがアタテュルクのようにイスラムを敵視する態度をとつてはいなかつた點については、とりたてて論じられることがなかつたように思われる。

本日の發表では、オスマン朝末期におけるイスラム改革主義の展開を跡づけるための第一歩として、まずオスマン人一般のイスラム觀と、その觀點からのナシヨナリズム批判とを検討して、ナシヨナリズムが興起する時代の思想風土を瞥見する。續いて、ナシヨナリストの反批判を吟味することによつて、彼らのイスラム觀、及びイ